

2020年5月3日

召命の根底にあるもの

復活節第4主日は「世界召命祈願の日」にあたっています。毎年、ヨハネ福音書（10・1-10）の羊の門と羊飼いの場面が朗読されることから「良い牧者の主日」とも呼ばれています。唯一の牧者はキリストに他なりません。キリストの声に耳を澄ませば、わたしたちの人生に隠された「召命」に気づくことができるかもしれません。教皇フランシスコは、「第57回世界召命祈願の日」教皇メッセージ「召命についての語—の中で、4つのキーワード（感謝、勇気、痛み、賛美）を挙げておられます。はじめに示されている言葉は「感謝」です。

「召命についての最初の語は感謝です。正しい航路を進むのは、自分の努力次第でもなければ、自分で選んだ進路だけで決まるものでもありません。[...]それはむしろ、天からの呼びかけに対する応答にほかなりません。[...]どの召命も、主がわたしたちに会いに来られるときの優しいまなざしから生まれます。主は、舟が嵐に襲われているときにこそ来てくださいます。『それはわたしたちの選択というよりは、主の無償の召し出しへの応答です。』」（<https://www.cbcj.catholic.jp/2020/04/22/20689/>）

召命の出発点にある言葉は「感謝」であるという教皇さまの指摘は素朴ですが、重みをもっていると思います。それは、わたしたちの日常生活を振り返ってみれば容易に気づくことができることかもしれません。「家族が共にいること」「学校で先生が子どもたちを迎えること」「郵便が届くこと」「安全な水が飲めるということ」「ゴミを収集する人がいるということ」「病気になれば医師や看護師が治療やケアをしてくれること」「健康や無事を祈る人がいるということ」。

考えてみれば、わたしたちの日常生活は無数の目に見えない奉仕によって支えられ維持されていることに気づかされます。もし、自分が受けてきた恵みに気づくことができれば、感謝の心が湧き起り同時にキリストご自身からの回心の招きも受けることでしょう。この《感謝の心と回心の招き》が強く現れたとき、わたしたち一人ひとりの召命はよりいっそう明らかになり、勇気をもってこれに応答することで召命は成長していきます。このように召命の根底に感謝の心が宿ることは大変重要ですが、どんな時もキリストからの呼びかけがあるということを忘れずにいたいものです。

「いつも喜んでいなさい。
絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。
これこそ、キリスト・イエスにおいて、
神があなたがたに望んでおられることです。」（1テサロニケ5・16-18）

新型コロナウイルスが蔓延する中、誰にとっても困難な時ですが、主にあって喜び、祈り、感謝の心を持ち続けましょう。菊地大司教さまは4月27日付で2つの書簡を公開されました。

「緊急事態宣言が発令されている間の現行の措置」

(<https://tokyo.catholic.jp/archbishop/diary/38489/>)

「緊急事態宣言のなかにあって」

(<https://tokyo.catholic.jp/archbishop/message/38449/>)

政府による緊急事態宣言が発令されている期間中は「いのちを守るために家にとどまりましょう」と呼びかけると同時に「公開ミサの中止」と「諸行事・活動の中止」という対応を継続する方針を打ち出しておられます。

わたしたちが魂の牧者であるキリストの呼びかけに応じてすべての人と連帯し、感謝と勇気、痛みと賛美をもって過ごすことができますように。

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝